

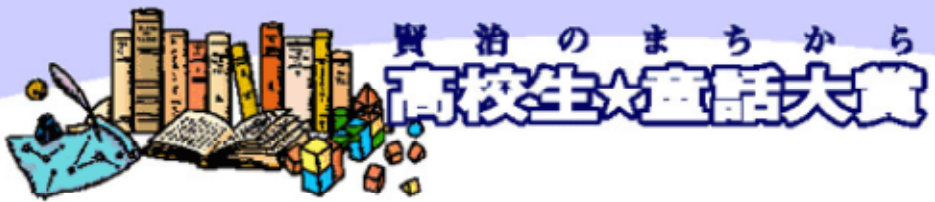
第 15 回 大賞(金の星賞)受賞作品

「めづ様」

岩手県立水沢高校二年 佐藤 礼菜



賢 治 の ま ち か ら
全国高校生★童話大賞



大賞 〈金の星賞〉

『めづ様』

岩手県立水沢高等学校二年 佐藤 礼菜^{あやな}

「めづ様が、いらっしやるんだって」

夏休み、お父さんの実家に向かうバスの中。小学五年生にして、初めての一人旅。お母さんに持たされた携帯電話からの声に、わたしはまばたきをした。

十歳年上のいとこのお姉ちゃん、千絵ちゃんからだ。

「めづ様？ おばあちゃんか、おじいちゃんの知り合いなの？」

窓から見える、山や田んぼの緑がとつてもきれい。目に優しい光景を眺めつつ、電話の声に耳を傾ける。道が悪く、バスが揺れるたび、電話の声が少し遠くなる。わたしは膝に乗せていたリュックを押さえた。

「うん、おじいちゃん達、今朝から一週間くらいいいないでしょ。だから、その間は私達だけでおもてなししなさい、って。調べている途中なんだけど、村の神様みたい」

おばあちゃんの家の辺りには昔話や伝説があつて、千絵ちゃんはそれを調べにおばあちゃんの家泊まりに来ている。大学で神様について調べているからか、何だか楽しそう。たしか村の神様についてレポートを書くとか言っていた。おばあちゃんやおじいちゃんにちょっとした話を聞くことはあったけれど、真面目に調べるのは初めてだし。千絵ちゃんに言われて着替えの他に自由研究の宿題を持ってきたのは、正解だったみたい。

おばあちゃん達は今、遠い親戚のおじいちゃんが百歳で死んでしまつて、お葬式に呼ばれている。だから、家には千絵ちゃんとわたしの二人だけだ。そこにもう一人、知らない人が来ると思うと、緊張する。神様って言うけれど、どんな感じなんだろう。

バス停に着くと、歩いて五分くらいのところにおばあちゃんの家がある。茶色い瓦屋根に、古めかしいガラス戸。玄関前の石造りの足場からは、少し土っぽい匂いがする。大好きな、なつかしい感じのする匂い。



汗をぬぐって戸を叩くと、千絵ちゃんが出迎えてくれた。明るい茶色の髪に、赤いジャージがよく似合う。顔を合わせた瞬間、千絵ちゃんの猫みたいな目が細くなった。

「かなちゃん、ひさしぶりー!」

戸口で千絵ちゃんに抱きつかれる。フワッと、シャンプーの良いにおいがした。会うのはお正月以来だ。

「お迎えする準備は終わってるし、夜の八時からいらっしやるらしいから、それまでは自由だよ。あ、自由研究持ってきたよね? 調べたとこまで教えてあげる」

靴を脱ぎながら、千絵ちゃんが笑った。わたしも入ろうとすると、後ろから声がかかる。近所のおばちゃんがたくさん野菜が入ったかごをかかえて立っていた。

「これ、ここの畑でとれた野菜。みんなで持ち寄ったんだよ。めづ様によるしくねえ」

ずっしりとしたかごを渡される。千絵ちゃんとお礼を言うと、おばちゃんはこのこして帰っていった。どうやらめづ様はかなりの人気者みたい。居間が上がってから、千絵ちゃんがノートと絵本を見せてくれた。おじいちゃんやおばあちゃんだけでなく、村の人にも聞いたんだとか。絵本を見てみると、少し黄ばんだ紙に、着物姿で狐のお面をつけた人の絵が描かれていた。

「めづ様は村の守り神なんだって。村のいろんな行事に出てるみたい」

絵本をめくると、昔、神様が天からこの村にやってきて、村で流行^{はや}っていた病気を治したという話から始まっていた。その後、神様から力を分けられた家の人が代々神様の代わりーめづ様として村を守っている。他のページには、めづ様が村のお祭りや行事に参加していたり、村の人と仲良くしている絵がたくさんあった。お盆の話もある。その家のご先祖様と話して、一緒に家に幸せを招くみたい。普段は神社にいるらしいから、あんまり知らなかったのはそのせいかも。

ただ、わたしは少し不安だった。千絵ちゃんは嬉し^{うれ}そうに話すけれど、わたしは人見知りをする。知らない人と七日間も一緒にいるなんて、なんだか気が遠くなりそう。めづ様専用の部屋が用意されているらしいけれど、食事と寝る時以外は一緒だし。そもそも、どういう人が分からない。千絵ちゃん



の説明を聞きつつ、わたしは必死に気をまぎらわせていた。おばあちゃん達が早く帰ってこないかな、と思いながら。

いくら不安に思っても、時間はやってくる。夜八時。二人で作ったカレーを楽しんで、片付けを終わらせた少し後。鳩時計の鳩が飛び出すのと同時に、玄関の戸を叩く音がした。その音に、びくりと背中がはねる。千絵ちゃんが「ちょっと待ってて」と言っ、居間を出ていく。にぎやかなテレビの音に気がなってテレビを消すと、部屋は気まずいくらい静かになった。玄関の方から、千絵ちゃんの声が聞こえる。廊下を歩く足音と話し声が、段々近づいてくる。つい手を握りしめると、ガラッと居間の戸が開いた。

「どうも、こんばんは」

男の人にしては高く、女の人にしては低い声。入ってきたその人を見て、わたしは思わず悲鳴をあげそうになった。あわてて口に手を当てる。その人ーめづ様は、狐のお面をつけていた。絵本では見ていたけれど、実際に見たらやっぱり驚いてしまった。

「めづ様。こっちがかな、わたしと同じ、この家の孫です」

千絵ちゃんが紹介する。わたしはおじぎをするのがやっとだった。めづ様があうなづく。

「もしかして、驚かせてしまったかい？ ごめんね、この格好がしきたりなんだよ」

少し困ったように言う。そのまま鼻を掻こうと思ったのか、顔に手を伸ばした。お面に気付いて、「おっと」と手を下ろす。肩をすくめる仕草がお茶目で、なんだか力がぬけてしまった。あんまり怖い人じゃなさそうで、少しほっとする。

「……こんばんは。よろしくお願ひします」

小さくあいさつすると、「楽にしているんだよ」と返された。男の人が着るような藍色の着物に、首元には水色のスカーフ。肩くらいまでの髪を後ろで一つに結んでいて、女の人なのか、男の人なのかよく分からない。千絵ちゃんにこそっと聞いても、うーん、と腕を組んだままで。不思議に思っていると、肩を叩かれた。ふいに視界に入ってきた狐のお面に、また驚いてしまう。



ふわり、とお線香の香りが鼻をかすめた。

「えっと……なんですか？」

めづ様が、お面を指差す。

「男に見えるかい？ 女に見えるかい？」

会話が聞こえていたのかな。顔がカアツと熱くなるのを感じた。

「うーん、と……女の人？」

めづ様は背が高いけれど、色白だし髪もとってもきれいだ。小さな声でや
つと言うと、めづ様が笑った。

「それじゃ、わたしは女だ」

からかうような口調。めづ様の言葉に、千絵ちゃんがへえっ、と小さく声
を上げた。

「神様って、男の人か女の人かはっきりしていることが多いんだけど……珍
しいな」

「伝説でも、はっきりしていないんだ。わたしも初めて聞いた時は、不思議
に思ったよ」

やっぱり耳がいいみたいで、めづ様がそれに答える。千絵ちゃんが少し顔
を赤くした。

「興味を持ってくれるのは、とても嬉しいことさ。なんでも気軽に聞いてく
れ。あ、でも、水菓子を出してもらえたら、それこそ私ははりきってしまう
な」

めづ様が笑う。「水菓子って？」と千絵ちゃんの服を引っ張ると、「果物の
ことだよ」と小声で教えてくれた。

次の日から、めづ様との生活が始まった。朝早くに起きて、夜は部屋でこ
先祖様へお祈りをする。家から出ることはできない決まりだけれど、家の中
では好きにしたいみたい。千絵ちゃんが料理を作ってたしはそれを手伝
う。食事めづ様の好みに合わせて和食と果物が多くなった。食事もお風呂
もめづ様が先だから、自然と行動が早くなる。おかげで、宿題の生活の記録
はお手本みたいに健康的になった。縁側で千絵ちゃんと一緒に伝説を教えて
もらえるのも楽しい。とはいっても、わたしは千絵ちゃんと違ってあんまり
お話できないから、聞いていることがほとんどだけれど。



そんな生活も四日目、めづ様自身のお話になった。わたしが自由研究用のノートにメモしていると、めづ様が口を開いた。

「かななは何か聞きたいこと、あるかい？」

急に声をかけられて、わたしは驚いた。話は、めづ様がお正月の朝早くに行われるお祭りに出たところだ。少し考えて、わたしは思い切って口を開いた。

「……めづ様は、それだけ仕事が多くて大変でしょう？ いやにならないの？」

わたしの質問に、めづ様は「そうだねえ」とつぶやいた。

「村の本当の神様の名前は、アキサネカミっていうんだけどね、漢字をこう書くんだ」

千絵ちゃんにペンを借りて、さらさらとノートに書いてみせる。そこには、きれいな字で「愛護神」と書かれていた。

「愛するものを護る。めづ様って名前も、最初の愛の字をとってあるんだ。昔の言葉で、愛するという意味だね。私はこの名前が大好きなんだよ」

そう言う声は、とても優しい。少し意外だった。めづ様はいつもどこかおどけた雰囲気があったけれど、今は一切そういうのを感じない。「だから」とめづ様は続けた。

「だから、大変っていうのはあんまり気にならないんだ。この村も、神様も、私は大好きだからね。大好きなもののためなら、いくらでもがんばれるのさ」

めづ様がそう言うと、気持ちいい風が吹いて、庭の木や花が嬉しそうに揺れた。村もめづ様が大好きみたい。頭をなでってくれる手は大きくて温かくて、むず痒い感じがした。

「めづ様、ありがとう。すごく良いお話を聞かせてもらっちゃった」

何だか恥ずかしくて、うつむきながらお礼を言う。でも、めづ様は何も言わなかった。不思議に思って顔を上げると、狐のお面は庭を見ていた。どうしたの、と首をかしげる。

「めづ様ね、照れてるんだよ」

いたずらっぽく千絵ちゃんが笑う。そこで黒電話が鳴った。めづ様が「ほら、早く出なさい」とあせったように言う。千絵ちゃんはというと、笑いをこらえきれない。



「もしもし、かなちゃん？」

電話に出ると、おばあちゃんの声がした。久しぶりに聞いた声に、ほっとする。

「うん、そうだよ。久しぶり、おばあちゃん。どうしたの？」

わたしの言葉に、千絵ちゃんが笑うのを止めた。真面目な顔をしてそばにやって来る。

「あのね、明日の夜帰れることになったのよ。大切な用事があるって言うたら、分かってくれてねえ。おもてなし、二人だけで大変だったでしょう？」

最後の日は、おばあちゃん達と一緒におもてなししようね。そう言うおばあちゃんの声は、穏やかで柔らかい。「気をつけて帰ってきてね」と言うて電話を切ると、わたしは千絵ちゃんに笑いかけた。

「おばあちゃん達、明日帰ってくるって！」

千絵ちゃんの顔が明るくなる。二人でハイタッチをした。めづ様が「良かったじゃないか」と腕を組む。わたしは大きくうなづいた。

次の日の夕方。夕飯を持って、二人で居間に行くと、めづ様はテレビを観ていた。紫の着物を着た女の人が、演歌を歌っている。めづ様が楽しそうに、歌に合わせて体を揺らす。何だかごきげんだ。それはめづ様だけじゃないけれど。きつと、もう少ししたらおばあちゃん達は帰ってくる。力強い歌声を聴きながらテーブルに夕飯を置いた。めづ様と同じ、でも少しだけ冷めた野菜の天ぷら。麦茶も持ってきて、千絵ちゃんと「いただきます」をしようとした時、テレビの画面が急に変わった。めづ様の動きが、ぴたりと止まる。青い画面に、アナウンサーの男の人が紙を見ながら、ニュースを話す。どうやら、県境で土砂崩れが起きたみたい。場所は、むずかしい漢字で書かれています。よく分からない。千絵ちゃんを見ると、真っ青な顔で食い入るように画面を見つめていた。「千絵ちゃん？」と声をかけると、ハツとしたようにうつむく。

「ちょっとおばあちゃん達に電話かけるね」

そう言って、居間を出て行く。めづ様を見ると、分からないみたいで首をかしげられた。もしかして、といういやな予感が頭をよぎる。戻ってきた千絵ちゃんの顔は、暗い。

「ねえ、もしかして、おばあちゃん達……」



わたしがおそるおそるたずねると、千絵ちゃんがうなづいた。さっき土砂崩れが起きた場所はおばあちゃん達の帰り道で、電話をかけてもつながらなかったとか。「大丈夫だとは思っけど」という千絵ちゃんの声は、やっぱり、暗い。ここまで落ち込んでいるのを見るのは初めてで、急に不安になってくる。重い、気まずい空気が流れた。ふいに、パンッと手を叩く音が響く。めづ様だ。

「お祈りをしよう」

静かな声。わたしは目を丸くした。一拍置いて、千絵ちゃんが声を上げる。

「お祈りって、めづ様がいつもしている？」

「そう、そのお祈り。私の部屋でね」

でも、と言いかける千絵ちゃんに、めづ様は優しいけれど、力強い口調で言う。

「信じるのが大事なんだ。不安なのは分かるけれど、それをこらえて気持ちを強く持つことが、ね。でないと不安が他の人にもうつってしまうから」
そう言って、めづ様がわたしを見た。千絵ちゃんが目を見開く。少しして、うなづいた。

「……分かった。でも、おばあちゃん達が帰ってきた時のために、私はここにいる。かなちゃん、……お願いね」

千絵ちゃんの目は、まっすぐに優しい。わたしはうなづくと、めづ様の手をにぎって居間を出た。

めづ様の部屋は、階段を上って二階にある。急な階段をずんずん上るその手は、大きくて、すべすべしていて、温かい。不思議な気持ちになりながら、転ばないように歩いていく。一番奥のふすまの前で、めづ様が立ち止まった。初めて入る、特別な部屋。めづ様が、

「ここに入ったら、おばあちゃん達が無事に帰ってくるということ、とにかく強く思っほしい」

と言って、菊の花が描かれたふすまに手をかけた。開いた先に、わたしは目を疑った。

不思議な空間だった。真っ暗な夜空みたいな中に、青や緑や黄色やピンクといった小さな蛍みたいな光が、ふわふわと飛んでいる。床があるのかも分からないし、明らかに普通の部屋じゃない。わたしがめづ様の手を強くにぎ



ると、「行こう」と声をかけられる。怖くて、足が震える。なんとか一歩踏み出すと、水たまりを踏んだみたい、ひたりと足音が鳴った。でも、足がぬれた感触はない。怖いような、なつかしいような気分になる。わたしは必死におばあちゃん達のことを考えた。近くを飛んでいた黄色い光が、まるでおじいちゃんと蛍狩りに行った時みたいで、手を伸ばすと少し温かい。そして、すぐふわりと逃げていってしまう。どこまで続くのか分からない空間に、声をかけようとした時、めづ様がくるりと振り返った。

「お祈りをする時は、お面を外さなければいけないんだ。だから、私がいいというまで目を閉じていてくれ」

怖いけれど、言われた通り目を閉じる。何の音もしなくて、めづ様の手の温かさだけが伝わってくる。

「……めづ様？」

つい声を出すと、笑ったような音の後、よく聞きなれた柔らかな声が降ってきた。

「かなちゃん、えらかったわねえ。千絵ちゃんと二人で、よくがんばったのね」

「おばあちゃん？」

思わず開けそうになった目を、温かい手にふさがれる。どうしてここにいるの、と聞くと、柔らかい声が笑った。

「かなちゃん、もう少しだけ、待っていてくれる？」

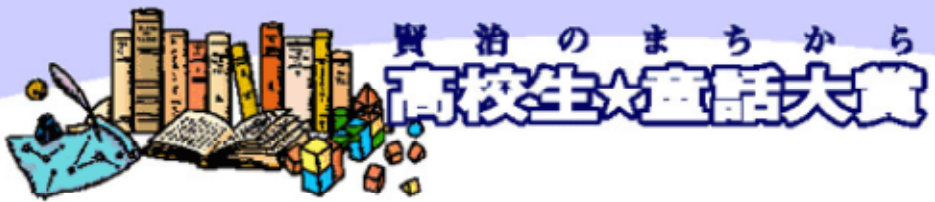
わたしは一瞬迷った。本当は怖いし、すぐにでもおばあちゃん達に会いたい。でも……。

大好きだから、だからこそ、がまんしなきゃ。わたしは泣きそうになるのをこらえて、半ば叫ぶように返事をした。

「大丈夫だよ、おばあちゃん達が帰ってくるまで、千絵ちゃんとめづ様と一緒に三人で待ってるから！ 留守番くらい、まかせてよ！」

「そう、えらいわねえ。よろしくね」

わたしの返事に、おばあちゃんが笑った。その後、目をふさいでいた温もりが離される。めづ様が、「もういいよ」と言った。ゆっくり目を開けると、畳が目に入る。水色の灯りの提灯に、きゅうりの馬とナスの牛、果物が飾ら



れたお仏壇。畳の匂いとお線香がふわりと香る和室に、わたしは目をこすった。

わたしがさっきのことを言おうとすると、めづ様は狐のお面の口元に指を当てた。

「さ、もう戻ろう。千絵が待ってる」

聞きたいことや言いたいことはたくさんあったけれど、わたしはだまっとうなづいた。でも、階段を下りる途中で一つだけ、わたしはどうしても聞きたいことをたずねた。

「ねえ、めづ様」

「なんだい？」

「めづ様とアキサネカミ様は、仲がいいの？ お祈りのことも、不思議だったし……」

わたしの質問に、めづ様が首をかしげる。

「どうだろう。私は好きだけれど、神様の考えていることまでは分からないな」

でも、とめづ様は続けた。

「私と愛護神様が仲良しに見えたのなら、それは私が愛護神様を信じているからかもしれないね。どう思われているかよりも、自分がどう思うかが大切だから。それに、いざという時、心の助けになるのが神様だからね」

分かるような、分からないような話。わたしが考え込むと、めづ様が苦笑いした。

「ようするに、神様だったり、おばあちゃん達のことだったり、何かを信じてることでもかなな達の不安が少しでもよくなれば、それが一番ってことだよ」「……じゃあ、わたしと千絵ちゃんの神様はめづ様だね。すごく、はげまされたから」

わたしが小さく笑うと、めづ様はきょとんとしたように固まって、それから頭をかいた。

居間に入ろうとすると、千絵ちゃんが出てきた。泣きそうな表情でいて、笑っている。



賢治のまちから
高校生★電話大賞

「良かった、声をかけようと思ったたところなの。さっき電話があってね、おばあちゃん達、もう少しで帰ってくるって！……二人のお祈りが通じたからかもね」

どうやら、土砂崩れが起きたのは通った後だったみたい。そのせいか電波の状況が悪くて、電話がつながらなかったとか。その話に、わたしはほっとした。でも、それはただ安心しただけじゃなくて、最初から分かっていたことが本当になったみたいな、不思議な安心だった。力が抜けて、なんだか笑えてくる。めづ様を見ると、ふっと笑ったような気がした。千絵ちゃんも笑っている。三人で笑いあっていると、ちょうど、庭のほうから車の音がした。二人分の足音とともに、よく聞きなれた声がする。

顔を見合わせて、それから、わたしたちは一緒に玄関へと向かった。